様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６４２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１５５

研究課題名（和文）文章と発話の自発性からみた主語標示の助詞「が・の」の計量的研究

研究課題名（英文）A quantitative approach to the subject markers ga and no in Spoken and Written Japanese

研究代表者
南部　智史（Nambu, Satoshi）

津田塾大学・学芸学部・研究員

研究者番号：４０６４９０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の主語につく格助詞「が」「の」の選択を中心に言語変化の理論的考察をコーパスおよび社会言語学的視点から行ったものである。特に、英語のデータをもとに提唱されている言語変化理論の仮説であるConstant Rate Hypothesisの検証を日本語のデータを使って行い、それを支持する結果が得られたことは大きな成果である。また、格助詞「が」「の」の選択に関わる諸要因のうち、主語と述部の隣接性には言語の認知処理に原因があるという仮説を立てて心理言語学的分析を進めた。その成果をもとに、失語症と神経言語学の観点を取り入れた研究枠組みへの拡張を行った。

研究成果の概要（英文）：I conducted a corpus-based study to obtain empirical data of the subject case particles ‘ga’ and ‘no’, and analyzed them from a perspective of sociolinguistics. Regarding the linguistic change, I was able to verify the Constant Rate Hypothesis, which was originally made with English data, using data from Japanese. In addition to that, I analyzed the observed change by style, referring to the concept of “Japanese Standard” claimed by Takashi Nomura at the University of Tokyo. Furthermore, the factor ‘adjacency’, which was detected in the corpus study, was analyzed by conducting several experiments from a psycholinguistic point of view, based on a hypothesis that it is relevant to our cognitive skills to process language. This perspective brought me to a new joint project with the Section of Neuropsychology at the National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities, in order to delve into linguistic aspects of the brain involving aphasiology and neurolinguistics.

研究分野：言語学

キーワード：格助詞　文法　言語変異　言語変化　コーパス　社会言語学　心理言語学

１．研究開始当初の背景

（１）主語につく助詞「が」と「の」は、生成文法の枠組みによる数多くの研究があるが、その言語内的要因（文法制約）と言語外的要因（話者の社会属性等）の両側面を取り入れた経験的分析が本格的にはなされていなかった。

（２）多くのコーパスが利用可能となっていることを受けて、定量的観点に基づき、文章と発話における「が」と「の」の使用にどのような言語外的／内的要因が影響するかを明らかにすることを目的とした。

２．研究の目的

本研究の主な目的は、当該現象に関する経験的データの提供であった。

（１）コーパスを利用することで詳細な統計解析に耐えうる量のデータを得て、その分析結果から助詞の選択に関わる様々な要因を解明すること、さらには他言語との比較により、言語変化理論への貢献を目的とした。

（２）コーパス調査によりその影響が判明した要因の言語学的、認知科学的な説明を試みるため、心理言語学的実験を行った。言語産出のデータであるコーパスに加えて、言語理解に関する実験データを取り入れることで、多角的な視点から当該現象の考察を行うことを目的とした。

３．研究の方法

（１）言語資料であるコーパスを複数使用することにより、より幅広いスタイル・年代の言語データを扱うことで言語変化や社会言語学的要因についての問題に取り組む手法を採用した。具体的には、「国会会議録」と「日本語話し言葉コーパス」から既に得られているデータに加えて、様々なレジスター（新聞、雑誌等）を収録した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)、さらに大正・昭和前期の発話資料である「岡田コレクション」を利用した。

（２）コーパス調査で得られた知見をもとに、心理言語学的手法を取り入れ、認知処理という観点から言語の経験的データを抽出した。手法は、日本語母語話者を対象とした容認度判断課題と自己ペース読文課題の２種類を採用した。

４．研究成果

（１）まず、格助詞「が」「の」の選択に関わる要因の解明を目的としたコーパス調査の結果、隣接性や話者の生年・発話年などがその選択に影響を与えることが判明した。話者の生年の影響に関しては、言語変化理論の視点から、主語表示の格助詞には「の」から「が」への変化が現在も進行していることを示しているという仮説を立てた。さらに、英語のデータで提唱されている Constant Rate Effect の仮説を検証する形で分析を進めた結果、今回得られたデータがその仮説に従っていることがわかり、個々の言語に関する知見だけでなく、人間言語に普遍的な規則の解明に貢献することができた。

（２）次に、今回得られたデータに対して、言語変化に関して前述と異なる視点である「日本語スタンダード」という言語のスタイルから考察を試みた。その背景には、進行中の言語変化を扱う言語変異理論で対象とされる言語は通常 vernacular（その土地の言葉）であるのに対して、今回扱ったデータは公的な場面での発話が中心だったことがある。今回のデータに含まれる言語スタイルは野村剛史氏の言うところの「日本語スタンダード」にあたると捉え、そのスタイルに言語変化が起きている例を観察したという視点を取り入れることを試みた。野村氏によると「日本語スタンダード」とは、日本にも西洋

のような演説（スピーチュ）が必要だと説いた福沢諭吉の例から、福沢が演説で採用した言葉は彼の母方言ではなく当時の「スタンダード」に基づいていたとしている。本研究で扱った岡田コレクションと国会会議録のデータについても（少なくとも文法レベルである主語表示「が」と「の」に関しては）日本語スタンダードを反映していると考えると、本研究のデータで観察された変化は個々の話者のそれぞれの日常の言葉（母方言）で起きている変化ではなく日本語スタンダードに起きた変化を反映しているということになる。ただし、前述のように社会言語学では通常、日常の言葉における言語変化を扱うため、日本語スタンダードという、多くの人々が日常の言葉である母方言とは別に習得する言葉において変化がどのように起きているかという点については、今後さらに追究しなければならない。

（３）また、本研究で用いたコーパス「岡田コレクション」に収録された大正・昭和前期の発話を分析することで、類似した特徴を持つ発話を収録している国会会議録のデータとの比較を行い、現代日本語との生起環境の違いを明らかにした。特に、主語表示「の」の減少という変化が当時存在していたことを定量的に示し、連体・終止形の一致と準体句の消失という言語的側面からその変化の進行具合について観察されたデータを示した。連体形述部や準体句といった言語的環境は主語表示「の」の選好環境であることから、本研究が提示したデータはこれら言語的環境の変化、つまり「の」選好環境の消失が「の」の減少を推進する役割を果たしたことを示唆していると論じた。また、理論言語学の立場から、この変化は主語表示「の」の認可に関わる素性Ｎの手がかりである述部連体形が顕在でなくなったことが「の」の使用率減少に結びついたと捉えられると論じた。

（４）主語表示「が」「の」の選択に関わる要因としてコーパス調査により割り出された隣接性の要因について、心理言語学的視点から経験的データを抽出し分析を行った。隣接性の影響とは、「の」主語がその述部と非隣接である場合に容認度が下がる現象であり、理論言語学におけるＤ認可仮説を手掛かりにその統語構造について新たな知見を得るべく経験的検証を行なった。容認度低下の効果を「の」主語と述部の間に現れる介在要素の統語位置から予測できるという先行研究での主張に基づいて実験をデザインした。本研究では非隣接環境の効果を実験により経験的に検証するため、容認度判断課題と自己ペース読文課題の２種類を採用した。まず、時の副詞（TP 付加詞）と場所句（VP 付加詞）の２要素を介在要素に用いた容認度判断課題の結果では、非隣接環境下で「の」主語の容認度低下が実証された。自己ペース読文課題の結果については、処理負荷が読み時間の遅延として表出するという仮説に基づき、介在要素の種類ごとにその効果を考察した。その分析の結果、時の副詞と場所句の組み合わせでは、予測した通り「の」主語条件において時の副詞（TP 付加詞）に読み時間の遅延効果が見られたが、予測に反して後続する場所句（VP 付加詞）でも遅延効果が見られた。場所句における効果が時の副詞からのあふれ効果かどうかを検証するため、時の副詞を様態の副詞（VP 付加詞）に置き換えたところ、様態の副詞では予測通り遅延効果が見られなかったが、後続する場所句では依然として遅延効果が確認された。いずれの場合も場所句は介在要素の２番目であり、その語順が場所句の遅延効果を引き起こしている疑いがあることから、その可能性を排除するために場所句のみを介在要素とした条件（「の」主語の属格解釈を避けるために固有名詞を採用）が検証されたが、やはり場所句での遅延

効果が見られた。本研究では場所句の効果が統語構造ではなく「の」の多義性による認知的処理負荷に起因する可能性に言及したが、その仮説の妥当性について今後さらなる検証が求められる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 7 件）

1. Nambu, Satoshi. On the Process of Syntactic Change: A Case from Subject Markers in the Standard Variety of Japanese. Sociolinguistics Symposium 21. University of Murcia, Murcia, Spain. 2016
2. Nambu, Satoshi, D. Y. Oshima, M. Nomura, & H. K. Hwang. “The Nominative/ Accusative Alternation in Japanese and Information Structure” Formal Approaches to Japanese Linguistics 8. 2016
3. 佐野真一郎,南部智史 「コーパスを用いた現代日本語における「が／を交替」の実証的研究」第 150 回 日本言語学会．2015
4. 南部智史「大正・昭和前期の「が／の」交替に関するコーパスを用いた研究」第 150 回 日本言語学会．2015．
5. 南部智史,中谷健太郎「「が/の」交替を巡る諸問題」ワークショップ.第 40 回 関西言語学会．2015
6. Lee, Y.-C., B. Wang, S. Chen, M. Adda-Decker, A. Amelot, Satoshi Nambu, & M. Liberman. “A crosslinguistic study of prosodic focus”. 40th IEEE International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing. 2015
7. Nambu, Satoshi & K. Nakatani. An experimental study on adjacency and nominative/genitive alternation in Japanese. FAJL 7. 2014.

〔図書〕（計 3 件）

1. 南部智史「従属節の主語表示「が」と「の」の変異」相澤正夫・金澤裕之（編）『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』2016, p.155-172.
2. Nambu, Satoshi. A quantitative analysis of the nominative/genitive alternation in Japanese. In Proceedings of BLS 36. 2016, p.292-306.
3. Nambu, Satoshi & Kentaro Nakatani. An experimental study on adjacency and nominative/genitive alternation in Japanese. In Formal Approaches to Japanese Linguistics 7. 2014, p.131-142.

〔その他〕
ホームページ等
https://sites.google.com/site/satoshinambu/

６．研究組織
(1)研究代表者
南部智史（Nambu, Satoshi）
津田塾大学 学芸学部 研究員
研究者番号：40649000